

國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕 古代都城雑感

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 敬, Aoki, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000395

古代都城雑感

青木 敬

日本史の教科書でもおなじみの藤原京や平城京、つまり古代都城は、いわば役人のための都市であった。平城宮へ出仕する役人の数は、およそ一万人と推計されているが、これだけの大人数が一カ所に居住し、毎日勤務するといった形態は、日本の歴史においてはじめてのことだった。都市の出現が社会や経済などに大きなインパクトを与えたことは、想像に難くない。

さて、都市の定義は多岐にわたるが、重要な要素のひとつとして水の確保と管理があげられる。都城の発掘調査において、上水道を大規模に配した証左はないため、基本的に大量の井戸を掘削し、生活用水を確保したとみられる。藤原京内は、一宅地につき井戸がひとつ設置されていることが推定されており、水資源が確保しやすい環境も都城の選定に不可欠な要素だったにちがいない。問題は排水である。道路側溝や堀河などを利用した排水体系が確立しなければ、多数の住民による排水をさばききれない。ということは、上下水の確保なしに、万単位の人口を抱える都市を維持・管理するのは不可能である。藤原京が藤原京内で標高が低い場所に所在し、結果として排水計画が万端とは言い難い状況と推察される。つまり、排水体系の不備こそ、藤原京がわずか一六年弱で平城京へ遷都した理由のひとつと思量される。

右で触れた都城の井戸だが、発掘調査により木製の部材を転用した井戸枠の例が多いことがあきらかになってきた。藤原京・平城京という都市の登場は、消費する膨大な資材をリサイクルし、モノを循環させるシステムの幕開けでもあった。奈良時代後半以降、瓦を転用した井戸枠が散見される。これも、寺院等で交換した瓦を再利用しようとする意識のあらわれだろう。都城では、役人の給食用と考えられる膨大な量の土器が出土する。奈良時代後半、食器様式は単調と

なり、同一器種の大小といった法量分画も減じていく。特定の器種がいくつもの用途にまたがって使用されたらしい。これも、膨大な消費量を満たすだけの生産量が追い付かなくなり、生産の能率化を図った結果だろう。飛鳥時代、半島や大陸の食事様式を日本でも導入したが、それは巨大化する都市によって解体されていった。

話題を変えよう。都城では牛馬などの動物資源も再利用され、一例として脳を取りだして皮鞆しに用いたという。昨年度、都城出土の牛馬骨の分布を調べ、こうした再利用とみられる個体がとくに東西市の周辺に多いことを卒業論文で指摘した学生がいた。いうなれば、市の周辺には膠を利用する業種、一例として墨づくりや皮鞆しなどの工房が存在した可能性を示唆するのだろう。他方、牛馬の頭を用いた漢人祭を修した痕跡と推定できる例も存在する。漢人祭とは、疫病対策あるいは雨乞いとして修された生贄祭のことで、かつて水野正好は、ウマの頭だけを埋納した遺構がその証左と説いた。牛馬の再利用を困難にする漢人祭は、律令制下において禁制であった。『続日本紀』天平一三年（七四一）二月七日に、生贄祭は杖打ちの上で罪を課すところあり、『類聚三代格』延暦一〇年（七九一）太政官符には、「牛を殺し漢神を祭るに用いることを禁制する」とある。諸国の農民に対し殺牛馬祭祀を厳禁し、違反者には懲役一年を科すのだから、殺牛馬は重罪だ。伝統的な習俗と経済活動とがせめぎ合う、古代都城の側面が垣間みえる。

古代都城の特徴のひとつに、碁盤の目状に道路を配した土地区画、すなわち条坊制がある。条坊制は、今も奈良や京都などに往時の姿をとどめているが、古代都城成立以前は、こうした街区が膨大に集積した街区など、当然のこと皆無であった。無数かつ大小の道が東西南北で交錯し、四方へ人々が行き交う。集落を通る道路では、これほど多くのチマタ（古代の交差点）が存在しない。従来なかった多方面から人々が往来する様を目の当たりにし、当時の人々が畏怖の念をいだいた可能性が高い。こうした往来にともない、無数のケガレが都市へ侵入することを恐れ、京内外での祓が整備されたはずだ。つまり、大祓をはじめとする各種の祓、疫神祭、道饗祭など、律令祭祀の成立は、都城という「都市化」された空間の成立と表裏一体だったのである。

（考古学）